平泉にて

利根川裕

死の想念は、すべてフィクションである。死については誰もが語る。しかし死を経験した人はいない。にもかかわらず、人はやはり死を構想する。

雪の降る日、平泉まで行った。途中、厳美渓の名勝は雪のなかにあって、橋上からの景観には、一種の悽愴さが漂っていた。すすむにつれ、雪は次第に深く、雲は次第に重く、寒さはいよいよ募った。やがて中尊寺に着き、参道をたどって金色堂まで行った。さいわい、雲は切れ、雪はやんでいた。白雪の降り残してや光堂、である。

慈覚大師の開基はともかく、藤原清衡が長治二年に工を起してから二十一年目に、ようやく中尊寺は成る。当時、堂塔四十余、僧房三百余と寺伝は記している。中尊寺は山の中である。樹木が蔽いかぶさり、丘陵が突出している。だからこれらの堂塔は、たとえば奈良の法隆寺や東大寺のように、一望に全容を見渡せる平地に建っているのではなかったろう。整合した伽藍配置ではない。欝然とした茂み、茶褐色の土肌が、光景に暗色の変化を与える。そして金色に輝やく堂宇にいたる。その効果は、おそらく異様な衝撃性をもっていたろう。この眩ゆさはほとんど狂気同然であったに違いない。

もっとも、「五月雨の降り残してや……」と嘆じた芭蕉も、こういうふうに光堂と出会ったわけではない。大部分の堂塔は焼尽していたし、肝心の金色堂は覆堂のなかにあった。私も同様だ。いまは鉄筋コンクリートの覆堂のなかに、それはある。

博物館の陳列とおなじく、金色堂はガラスに囲まれている。そのせいか、三間四方の小堂は、建築物というより大きな工芸品と見える。

平泉の文化が王朝文化を移したものであることは、言うまでもない。清衡の建てた中尊寺、二代基衡の建てた毛越寺、三代秀衡の建てた無量光院、これらはみな王朝ふうを模し、京から仏師寺工を招いている。無量光院のごときは、宇治平等院を直接模したもので、それとほぼ同様の結構であったと、「吾妻鏡」は記している。中央政府が贅美を尽したとおなじものを、東北の一豪族が作ろうとしたのはなぜか。自己のもつ権力と富強のプロパガンダでもあったろう。中央に対する地方人の憧憬と劣等感もあったろう。しかし藤原三代の念願には、も一つはげしい執念のようなものが感じられる。たんなる模倣であったら、ついに亜流で終る。平泉の文化は、たんに王朝文化の亜流にとどまらなかった。彼らは、京を模しながら、京風をつき破る。金色堂の美

と力は、そういうものである。

周知のように、金色堂の須弥壇下には、清衡、基衡、秀衡三代の屍体がミイラとなって保存されている。彼らは自己の死場所としこの贅美なものを建てた。金色堂の美と力は、清衡の死の想念が作りあげたフィクションの強力さにほかならない。

もともと、中尊寺建立は、清衡の切実な死の想念から生れる。その供養願文によれば、前九年の役、後三年の役において、敵となり味方となったものの霊を慰めるためのものであつた。戦火はつい昨日までのこととしてあった。清衡はおびただしい人間の死を見つづけてきた。あるいは権力利害をめぐって離合集散する人間の心の暗さをも見つづけてきた。肉親骨肉の殺戮もくぐりぬけ、政治的陰謀の陥しあなもくぐりぬけてきた。生き残って権力者となったのは、たぶん偶然の幸運にすぎまい。

そういう人間が見た死のフィクションが、金色堂である。清衡は死をそういうものと見た。あるいは、そういうものと見なければ生きつづけられなかった。彼の死のフィクションに、曖昧で情緒的なものはない。彼の体験した過酷な生が、それを許すはずはなかろう。

二代目の基衡の建てた毛越寺は、いまは完全な廃墟である。しかし残っている南大門の礎石の大きさと、その前方にひろがっている池の広さから、往時の規模はうかがい知れる。学術的検討を経た復元想像図を見ると、その壮大な贅美に一驚する。二代目である心のゆとりと暗合するように、この寺は山を負う平地に整然と堂塔が位置している。池には竜頭鷁首の船を浮かべて、歌舞音曲を楽しんだという。むろん王朝趣味だ。しかし京都と違って、半年以上は風雪に荒らされる東北では、船をうかべる日はきわめて限られていたろう。にもかかわらず巨費を投じて竜頭鷁首の船を作った。京の王朝が作りあげたものは何一つ欠けてはならぬ。この世の最美最高のものは、すべてここになくてはならぬ。そうさせるのは、彼の浄土への構想力である地上安楽土のイメージである。死の世界をそういうものと見なければ、彼もまた生きてはいけなかったのだろう。

人間にとって、死の構想力は、生についての認識力とまったく等価である。

三代秀衡になると、藤原一族の権勢は極まる。その彼が父祖以来の極楽浄土観を結晶させたのが、無量光院である。その規摸、その結構が前二者の寺院を凌ぐものであることは、史書に明らかである。しかし、これとてもすべて焼け滅んだ。

芭蕉が平泉を訪ねるのは、秀衡歿後、ほぼ五百年である。「仕官懸命」を捨て「旅に死せん」ことを心にきめている詩人の構想力は、極楽浄土の顕現というフィクションとは別種のものであった。堂塔を建てる権力と絶縁した詩人は、だから言う。

「三代の栄耀一睡の中にして、大門のあとは一里こなたにあり。……国破れて山河あり、城春にして草青みたりと、笠うち敷きて、時のうつるまで泪を落し侍りぬ。夏草や兵どもが夢の跡」と。

金色堂に吹きつける風よりも、詩人の心をわたる風のほうが冷たいようだ。